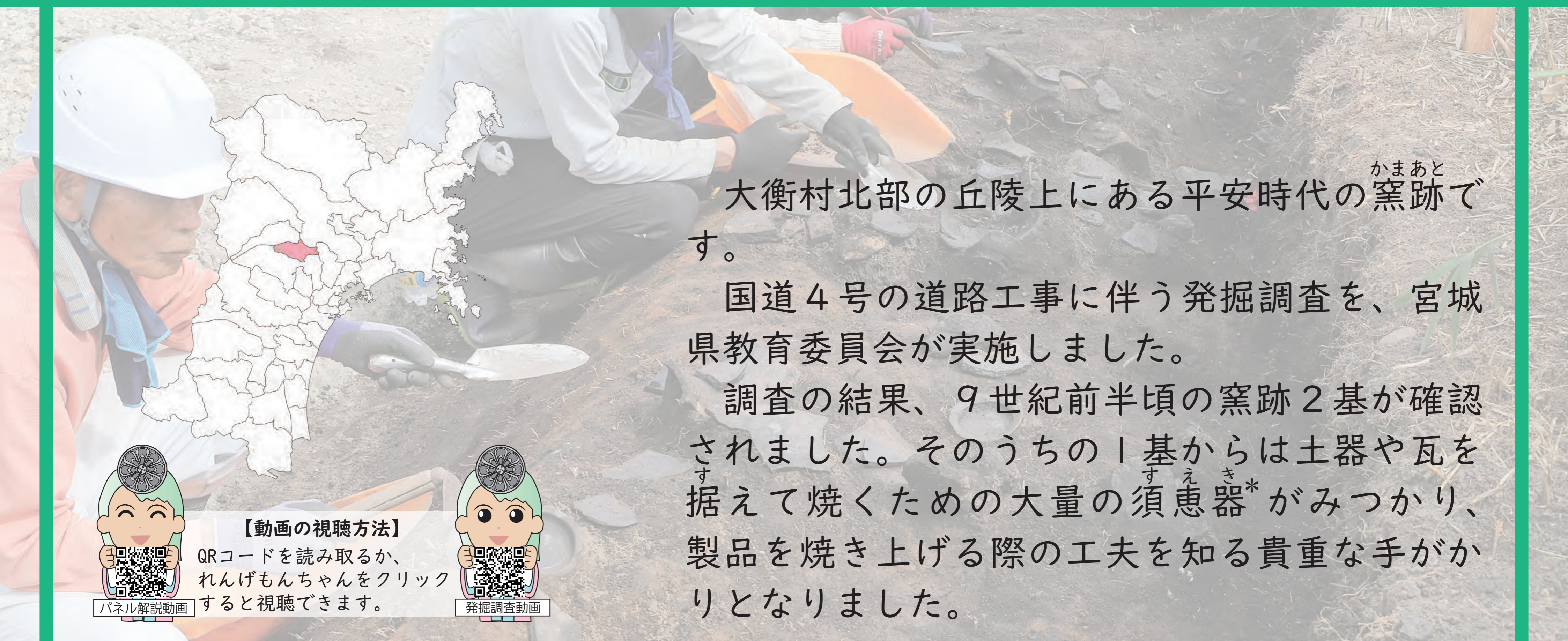




窯に残された須恵器の使い道

⑧吹付C窯跡 (大衡村駒場)



大衡村北部の丘陵上にある平安時代の^{かまあと}窯跡です。

国道4号の道路工事に伴う発掘調査を、宮城県教育委員会が実施しました。

調査の結果、9世紀前半頃の窯跡2基が確認されました。そのうちの1基からは土器や瓦を据えて焼くための大量の須恵器^{すえき}*がみつき、製品を焼き上げる際の工夫を知る貴重な手がかりとなりました。

【動画の視聴方法】

QRコードを読み取るか、れんげもんちゃんをクリックすると視聴できます。



旧石器

縄文

弥生

古墳

飛鳥

奈良

平安

鎌倉

室町

安土桃山

江戸

明治



すえき
須恵器は、1000度以上の高温を保って焼かれるんだ。
途中、窯の焚口や煙出しの穴をふさぎ、酸素を遮断して焼き上げるため、窯の内部や製品は青みがかった灰色になるんだって！

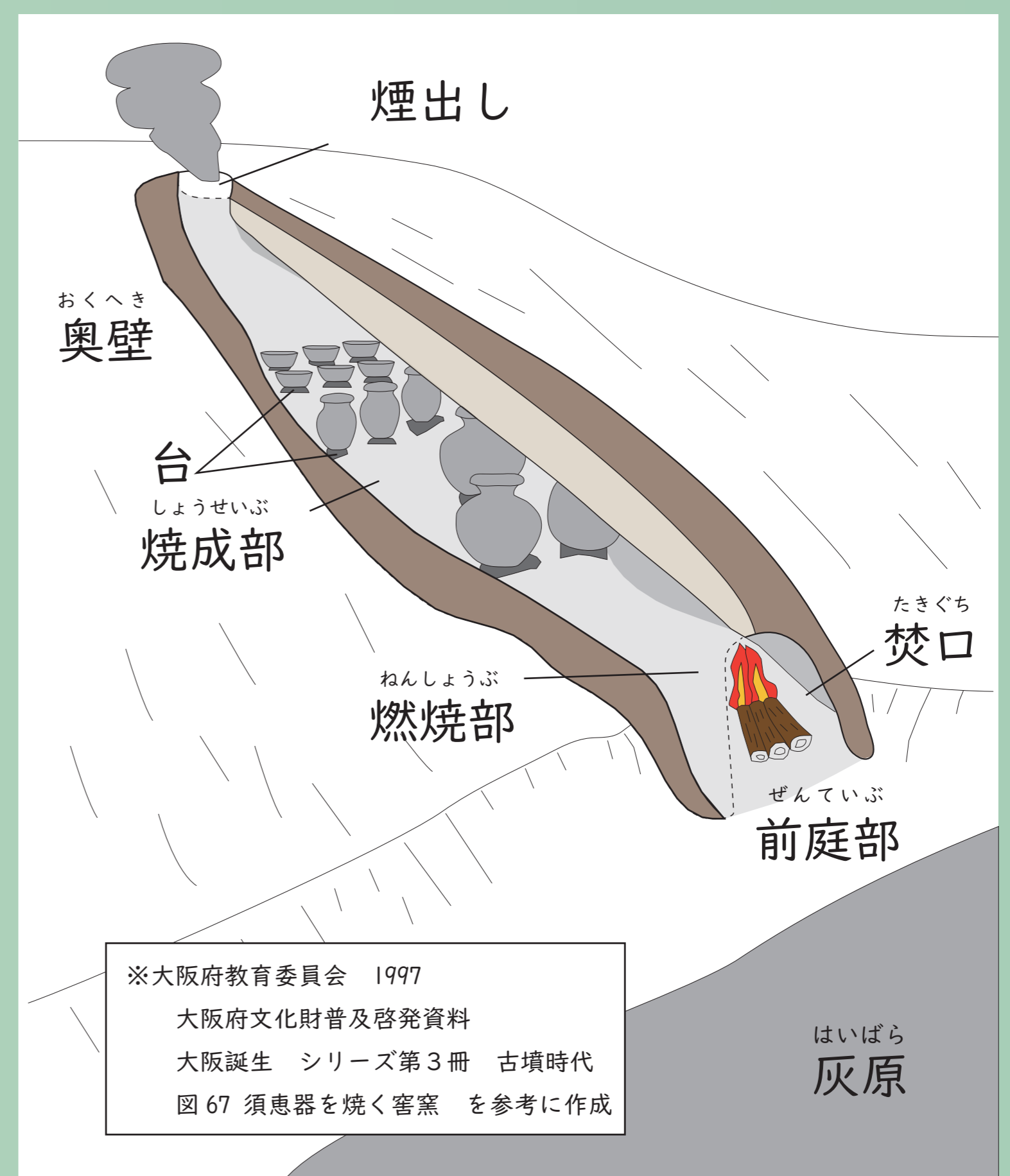


1号窯の様子（東から）

しょうせいぶ
焼成部からは、割れたり、歪んだりしている失敗品の須恵器が、多くは伏せられた状態で見つかりました。これらは、製品を上置いて焼くための台であったとみられます。製品を安定させて焼くための、失敗品を用いた工夫と考えられます。



はいばら
灰原からは、焼き損じたため出荷されなかった須恵器が数多く見つかりました。



すえきかま
須恵器窯の模式図